

# ペルシア語読書会「Dr. デフガーニーと読むルーミー著『精神的マスナヴィー』」及び公開講演会「ペルシアの抒情詩」 ガザル

田代智恵子

2024年秋、本学教授の佐々木あや乃先生が研究代表を務める科学研究費（基盤研究（C）「ペルシア語神秘主義叙事詩『精神的マスナヴィー』のデータベース化によるテキスト研究」）のプロジェクトの活動の一環として、イランよりペルシア文学研究者モハンマド・デフガーニー博士が本学に招へいされた。今回が初来日となったデフガーニー博士は、イランの古典詩から現代詩までを射程に入れる気鋭の研究者である。主な著書に『恋の誘惑：ペルシア文学における愛の変化に関する研究（*Vasvase-ye 'āsheqī: barrasī-ye taḥavvol-e 'eshq dar adab-e Pārsī*）』（1998/1999）、『神の町から人間の町まで：古典文学および現代文学の研究（*Az shahr-e khodā tā shahr-e ensān: dar naqd -o barrasī-ye adabiyāt-e kelāsīk -o mo'āṣer*）』（2010/2011）などがある。また博士がシリーズで執筆中の『イランの歴史と文学（*Tārīkh -o adabiyāt-e Īrān*）』（ネイ出版）や、ペルシア文学に関する講演活動や市民講座はイラン全土で人気を博している。欧米や東アジアへの関心も高く、歴史や哲学、宗教、心理学の分野でも多数の著書や翻訳を出版してきた。そのデフガーニー博士を、折しもイランをめぐる情勢悪化の影響が懸念される中、無事に日本へ迎えることができ、読書会や講演会、授業をしていただけたことは非常に幸運なことであった。

まず初めに、博士の来日翌日より、ペルシア語読書会「Dr. デフガーニーと読むルーミー著『精神的マスナヴィー』」が総合文化研究所の協力のもと、全4回に分けて開催された。本学の教員及び大学院生、学外の研究者など、各回3～6名程度が参加しデフガーニー博士の解説に熱心に耳を傾けた。13世紀のペルシア神秘主義詩人ルーミーの『精神的マスナヴィー』という神秘主義文学の大著は、詩人の即興的な連想に次ぐ連想によって、複雑な入れ子構造を成している。詩人はある物語を語り終えるか終えないうちに別の逸話を語り始め、またその中でその主張を補強するため別の逸話に取りかかる。物語の筋や主張を見失わないためには全体を見渡すことのできる案内人が必要であり、デフガーニー博士はまさに適任であったといえよう。博士の解説は、クルアーンはもちろんその他のアラビア語文献、ペルシア語の韻文・散文を自在に横断し、時にはユングやブッタの思想にまで及んだ。また、文化的背景を踏まえた単語の正確な解説は、外国人としてペルシア文学を研究する報告者にとっては一つ一つが貴重な示唆となった。

第二回で扱われた『精神的マスナヴィー』の逸話より、特に印象深かった「恋人の家の扉を叩いた話」を紹介したい。ある男が、恋人の家を訪ねてゆき、扉を叩くと中から「誰か」と問われた。男が「私です」と答えたところ、恋人に「ここは未熟な者が来るところ

ではない」と冷たく追い返されてしまう。男は別離の苦しみに苛まれつつ一年を旅に暮らし成熟したのち、再び恋人の家を訪れた。「誰か」との問いかけに、男が今度は「あなた自身です」と答えると、ついに中へ招き入れてもらえたのだった…。逸話には「一つの家  
に二人の私は居られない」という詩句が続けられる。さらに「針穴に二本の糸は通せない  
が一本ならば通せる」、そして「修行というハサミによって小さくしない限り、ラクダの  
体は針穴を通らない」というクルアーンを援用した詩句へと展開されるのだが、これはデ  
フガーニー博士の解説によれば、禁欲や修行によってラクダつまり自我を減じない限り、  
神との合一に至ることはできないという主張である。デフガーニー博士の表情豊かな、抑  
揚の効いたペルシア語を聴いていると、神秘主義文学作品特有の難解さは和らぎ、物語が  
生き生きと立ち現れ、心に語りかけてくるのが不思議であった。

続いて10月3日に開催されたのが公開講演会「ペルシアの抒情詩」である。恋愛抒情詩  
に関心があるとの学部生の声を受け、デフガーニー博士に抒情詩＝ガザル<sup>ガザル</sup>についての講演  
を依頼したところ快諾され、開催の運びとなった。会場の総合文化研究所には、学部生10  
余名を含む20名近くが集まり盛況であった。

デフガーニー博士は初めに、ペルシア古典定型詩の代表的な詩型の一つであるカスィー  
ダ（頌詩）から、後にガザルが独立した過程を解き明かした。宮廷で発展したカスィーダ  
は、王や庇護者を称賛することを主な内容とする比較的長い詩である。冒頭で自然描写ま  
たは恋人の描写を行ったのち、主題である王の称賛へと移行する形を取ることが多く、ガ  
ザルはこの冒頭部分が独立したものと考えられている。デフガーニー博士によれば、詩は  
他者や社会に向けて語られる詩（she'r-e jalvat）と、自らのためにのみ語られる詩（she'r-e  
khalvat）とに分けられる。カスィーダが自らのためにのみ語られる詩行で始まり、他者や  
社会に向けて語られる詩行へと移行する構造を持つ一方、ガザルは純粹に自らのためにの  
み語られる詩であるという。宮廷詩人たちは、庇護者のためにカスィーダを詠むことで  
日々の糧を得、互いに切磋琢磨し腕を磨いた。ガザルは10世紀前半の宮廷詩人ルーダキー  
の作品の中にその萌芽が見られ、13世紀の詩人サアディーにおいて頂点に達する。デフ  
ガーニー博士は、この二人の詩人からそれぞれ二篇の作品を選び、ペルシア詩に馴染みの  
ない学生のため、平易な言葉を選びながら、一行一行に解説を施した。

一つ目に取り上げられたのはルーダキーの「黒い瞳の人と楽しく生きよ」で始まる有名  
な詩である。過去を悔やみ未来を憂うのではなく今を楽しもう、という思想は後にオマ  
ル・ハイヤームの四行詩<sup>ルバーイー</sup>に受け継がれるものである。二つ目は、ヨセフ物語に登場する  
3枚の衣服の運命に、恋する人が置かれた状況をなぞらえた詩である。ただし現存状況か  
ら、ルーダキーの作品を純粹なガザルとみなすには躊躇いの余地がある、とデフガーニー  
博士は指摘している。三つ目は、サアディーのガザルが取り上げられた。糸杉のような背  
丈、弓の眉、理性を奪う輪繩のような巻き毛といったペルシア古典詩特有の恋人にまつわ  
る濃密な比喩に、学部生たちは驚きを隠せない様子であった。四つ目は同じくサアディー  
であったが、ここでは恋人の魅力的で思わせぶりなしぐさを表すkereshmeやnāzといった  
日本語で表現しがたい単語の詳細な解説に会場が沸き立った。ルーダキーの機知に富む恋  
愛詩から、恋の激情が言葉の技巧の限りを尽くして詠みこまれたサアディーのガザルま  
で一息に味わい、ペルシアの抒情詩の魅力は学部生たちに十分に伝わったに違いない。

デフガーニー博士の滞在中には、標記の読書会及び講演会だけでなく、別途報告する日本詩人クラブ主催のイベントも開かれ、研究者や学生たちとの交流や、意見交換の場も多く設けられた。日本におけるペルシア文学研究を盛り上げる、最良の機会となったと思う。また、報告者はデフガーニー博士より一対一で古典詩の読み方を教わる機会に恵まれ、言葉には言い尽くせないほどの多くの学びを得、刺激を受けた。博士は、時に細かすぎるような報告者の問いにも常によどみなく、根気強く答え、研究に対する惜しみない助言をくださった。帰国から数か月が経った今も、感謝の念に堪えない。同時に、デフガーニー博士を招へいし、このような機会を与えてくださった佐々木あや乃先生はじめ、博士の滞在に様々な形で協力してくださった本学ペルシア語特任准教授のナスリーン・シャキービーモムターズ先生、大阪大学講師の中村菜穂先生、本学非常勤講師の鈴木珠里先生、日本学術振興会特別研究員PD（東京大学）の村山木乃実氏には、この場をお借りして心からお礼申し上げたい。



「ペルシアの抒情詩」開催風景

### ペルシア語読書会

## Dr.デフガーニーと読む

# ルーミー著『精神的マナヴィー』

第1回 2024年9月27日(金)  
第2回 9月30日(月)  
第3回 10月4日(金)  
第4回 10月7日(月)

13:00～17:00 途中休憩あり  
【場所】総合文化研究所(研究講義棟422)

【講師】モハンマド・デフガーニー博士

イランの文字研究者、作家、翻訳家、ペルシア語・ペルシア文学博士。イランの文学、歴史分野における著書多数。欧米やアジアへの関心も高く、歴史、心理学、哲学の世界的名筆のペルシア語訳を出版。幅広い見識を活かした講演やペルシア文学講座は、イラン全土で人気を博している。

読書会は初登壇する博士を案内した、20世紀のペルシア詩人ジャラルディーン・ルーミーによる神秘主義叙事詩『精神的マナヴィー』を読み聞かせます。

各回前日までに申し込みください。ペルシア語テキスト(PDF)を配布いたします。  
【参加費】無料 【お申込み先】 田代智恵子 tashiro.chieko.o@tufs.ac.jp



### ペルシア語読書会

「Dr. デフガーニーと読むルーミー著『精神的マナヴィー』」(全4回)

講師：モハンマド・デフガーニー博士

第1回 2024年9月27日(金)

第2回 9月30日(月)

第3回 10月4日(金)

第4回 10月7日(月)

各回13:00～17:00開催、途中休憩あり

場所：総合文化研究所(研究講義棟422)

主催：科研費基盤研究C

「ペルシア語神秘主義叙事詩『精神的マナヴィー』のデータベース化によるテキスト研究」

(研究代表者：佐々木あや乃)

### 講演会「ペルシアの抒情詩」

登壇者：モハンマド・デフガーニー博士

日時：2024年10月3日(木)16:00～17:30(5限)

場所：東京外国語大学総合文化研究所(422室)

言語：ペルシア語(通訳なし)

主催：科研費基盤研究C

「ペルシア語神秘主義叙事詩『精神的マナヴィー』のデータベース化によるテキスト研究」

(研究代表者：佐々木あや乃)

### 東京外国語大学 公開講演会

## ペルシアの抒情詩

# مشوق عشق زراراد

در سبب آن دل چینی نبی



2024年 10月3日【木】入場無料

【日時】16時～17時30分(5限) 終了後に懇話会あり

【会場】東京外国語大学 総合文化研究所(422室)

【講演言語】ペルシア語(通訳なし)

【参加費】ペルシア語学習者ならどなたでも参加できます

【申込み】右のQRコードからお申し込みください(10/2締切)

【講師】モハンマド・デフガーニー博士  
Dr. Mohammad DEGHANI

イランの文字研究者、作家、翻訳家、ペルシア語・ペルシア文学博士。イランの文学、歴史分野における著書多数。欧米やアジアへの関心も高く、イランにおいて歴史、心理学、哲学の世界的名筆のペルシア語訳を出版。著作・翻訳作品の講演活動やペルシア文学を中心とした市民講座はイラン全土で人気を博している。

問い合わせ：佐々木あや乃 (sasakiayano@tufs.ac.jp)  
主催：科研費基盤研究C「ペルシア語神秘主義叙事詩『精神的マナヴィー』のデータベース化によるテキスト研究」(研究代表者：佐々木あや乃)